

第三章・勃発

宗教にはこんなにも多くの悪事をそそのかす力があつた

ルクレティウス

すべての共同体において暴力的な噴出と蜂起に先立ってその道筋を用意する、静かで微妙な影響を追跡することの難しさは、大きな出来事を取り扱う歴史家を常に憂鬱にさせる。彼は多くの原因を発見し、それらをきちんと記録するのであるが、常に何かが漏れていることに気づくであろう。世論の変化する潮流、関心事、党派、気まぐれの底流、非論理的な感情、または無知の偏見の渦は非常に複雑に数多くの力を発揮するため、それらすべてを観察して評価し、それぞれが嵐の発生に与えた影響を推定することは人間の知性と精勤を超える課題である。小さな事件を記録する者にはさらに大きな不利がある。細かい活字が大文字ほど読み易くないように、彼はその判断を導くための事実をより僅かしか持たない。

一八九七年の大部族動乱の原因を明言しようとする試みにおいて、ヨーロッパ人はアジア的な動機を測ったり、視点を推測したりできないという事実がその困難をさらに増大させる。しかしその問題を素通りすることは不可能である。私は細部を無視することにして、少なくともインドのイギリス政権が直面した恐るべき連合体につながった最も重要で明白な力について指摘したいと思う。

「フォワード・ポリシー」において最も著しい事件は、チトラルの保持であつた。守備隊、道路、部族税は、部族民に文明の近接と前進を認識させた。山岳地帯の住民の大多数は独立を愛してきたが、その自由が実際に縮小されるまでは、物質的な繁栄の進行に宥められて受動的な服従を続けることを厭わないかもしれず―実際にその通りである。英国の旗がチャクダラとマラカンドに翻つていた二年間でスワット渓谷の貿易はほぼ倍増した。文明の太陽が丘の上に昇るにつれ、商業の美しい花が開き、これまで野蠻の霜に凍り付いていた需要と供給の小川が解けだした。穏やかな暖気を浴び、新たに見つけた豊かさと同様に快適さを享受して先住民のほとんどは満足していた。二年の間、交代兵は一発も撃たれることなくチトラルを行き来していた。郵便袋が盗まれることもなく、配達人が殺されることもなかった。獐猛な丘の男たちの間を自由に騎行する政務官たちは以前であれば武力が解決したであろう多くの紛争を解決するために招かれた。

しかし、ある階級はイギリスの権力の接近を素早い理解力と激しい敵意をもって見ていた。アフガン国境の聖職者たちは即座にチトラル道路の持つ全ての意味に気づいた。彼らの敵意の原因を知るのは難しいことではない。文明との接触はムラーの富と力が依って立

つとこの軽信と無知を攻撃する。無意識のうちに迷信の強さを奪う、その文明的で教育的な支配に対するインドの宗教勢力の全体的な連携は将来の危険の一つである。ここにマホメダニズムは脅かされ、敵対を受けたのである。幅広い、しかし静かな扇動が始まった。部族間のあちこちへ使いが出た。種族間に戦争、聖なる戦争のひそひそ話が非常に情熱的に狂信的に囁かれた。巨大で神秘的な作用が働いた。その力を合理的精神で理解することはできない。北部の野生の谷のそれよりも明敏な頭脳が準備を行った。秘密の激励が南部―つまりインド本国―から来た。実際の支援と援助はカプールから与えられた。

無知と迷信の奇妙な薄明りの中で、部族民は超自然的な恐怖と疑念に襲われ、天上の栄光の希望に誘惑され、驚くべき出来事を期待するよう説かれた。何かが来ていた。彼らの種族と信仰にとって素晴らしい日が間近に迫っていた。やがてその瞬間が来る。彼らは注意し、準備をしていなければならぬ。山は火薬庫のように爆発物で一杯になっていた。しかし火花が欠けていた。

とうとう時が来た。出来事が奇妙に組み合わさって機会の価値を高めるように作用した。ギリシヤに対するトルコの勝利／「ジハード」に関するアミールの著作の回覧／彼がイスラム教のカリフの地位に就任したこと、および英印新聞紙上でのとても軽率な記事「マホメダニズムの再燃」といったテーマに関する英印新聞の記事、教育を受けた現地人の心に最も扇動的な現地紙の空論よりも大きな影響を与えるのである」が合体してマホメダニズムの「ブーム」を生み出した。

その瞬間が幸運だったのは／その男が欠けていなかったことである。カトリック教会の正規の司教や枢機卿にとつての隠者ピエール（*第一回十字軍に先立つ民衆十字軍を率いた指導者）がアフガン国境の通常の聖職者にとつてのマッド・ムラーであった。自らの神聖な使命と奇跡の力を同様に確信している荒々しい熱狂者は異教徒に対しての十字軍、すなわちジハードを説いた。地雷が火を噴いた。炎が地面を走った。四方八方で爆発が起った。その残響はまだ消えていない。

準備は大掛かりに広範囲に行われていたが、部族民と政府の関係を維持していた注意深いエージェントたちにはそれが見えなかった。とても驚かされるのは、その人たちの間の知識と目的の逆転現象である。すなわち彼らを最もよく知っている人々こそが最もよく知らず、より論理的な精神を持った研究者ほど対象について理解できない、と言えるかもしれない。いずれにせよ、熱心に情報を収集し、部族民の間に流れる空気を観測していた有能な人々の間には全方面に蓄積されつつある潜在的な力に気づいた人はいなかった。六月のマイザルでの奇妙な裏切りは線香花火的企てであった。まだ誰も危険と見ていなかった。上スワットに熱狂的な運動があることが気づかれたのは七月の初めであった。その時でさ

えその意義は無視され、その重要性は過小評価されていた。マッド・ファキールが到着したことが知られた。その力はまだ秘められていた。それが明らかになるまでに時間はかからなかった。

無知で好戦的な東洋の人々に狂信が及ぼす力を十分に理解することが、現代のヨーロッパ人には不可能ではないにしても困難であることを神に感謝する。西洋諸国が宗教的な論争に剣を抜いてから数世代が経過し、暗い過去の邪悪な記憶は、合理主義と人間らしい思いやりの強い明るい光の中でやがて消え去った。確かにキリスト教は残酷さと不寛容によって劣化し歪められているが、私たちが予防接種によって天然痘から保護されているように、常に人々の情熱に緩和の影響を及ぼし、より激しい形の狂信の熱から保護していることは明らかである。しかし、マホメダンの宗教は不寛容の猛威を軽減するのではなく増大させる。それはもともと剣によって広められ、それ以来その信者は他の全ての宗教の信者よりもこの狂気の形に服従させられてきた。苦勞の成果、物質的な繁栄の見通し、死への恐怖すらたちまち傍らに投げ捨てられてきた。苦勞の成果、物質的な繁栄の見通し、死への恐怖。すべての合理的な熟慮は忘れ去られる。彼らは武器を手に入れて―狂犬と同じくらいの危険性と浅慮の―ガジになり／そのような扱いにふさわしくなる。部族民のより豊かな精神は血に飢えた宗教のエクスタシーに身悶えするが、より貧しく、より物質的な魂は他の力、すなわち略奪の期待、戦いの喜びにさらなる衝動を感じる。こうして国全体が戦いに立ち上がる。このようにして、トルコ人は敵を撃退し、スーダンのアラブ人は英国軍の方陣を破壊し、インド辺境の蜂起は遠く、広く伝播する。どの場合にも文明が好戦的なマホメダニズムに直面している。進歩の力が反動の力と衝突する。血と戦争の信仰が平和の信仰と向き合う。幸いなことに、通常は平和の宗教の武装の方が優れている。

人々の並々ならぬ軽信は考えられないほどである。もしマッド・ムラーがマラカンドとチャクダラの攻撃に参加するよう呼びかけたなら、彼らは拒否したであろう。代わりに彼は奇跡を成し遂げた。彼は自分の家に座り、少量の食物やお金の捧げ物を持って訪ねて来たすべての人にその返礼として少量の米を与えた。彼の蓄えは常に補充されていたので、彼は何千人をも養ったと主張できたであろう。また自分の姿は夜には見えなくなると力説した。部族民が部屋を覗いたところ、誰もいなかった。これらのことに彼らは驚嘆した。最後に彼は異教徒を滅ぼすと宣言した。助けはいらない。その名譽を誰とも共有する気はない。天が開き、軍勢が降りてくる。彼が助けはいらないと断言すればするほど、部族民はどんどんやって来た。ちなみに彼は部族民には弱みはないと言っていた／エージェントが論拠を見せてくれた。私は捕獲した巻物を見せてもらった。その中には―異教徒を殺すべき軍隊に襲撃をかけ、その数の四分の一を戦野に残したまま部族民がよろよろと帰ってきたとき―ですら生存者の信仰は揺るがなかった。疑っていた者だけが死んだのである、

とムラーは言った。そしてこれが一二ポンド榴散弾がお前たちの聖人に与えた唯一の影響である、と言って打撲傷を見せた。

私は原因と仮説の荒海から、結果と事実の確固たる陸地へと安堵しながら移動する。マラカンドに届いた上スワットおよび周囲の部族の扇動の噂と報告は、駐屯地のパシヤン人セポイには十分に重く受け止められた。七月が進むにつれて数人の指揮官は大きな出来事が差し迫っている、と部下から警告された。政治エージェントのディーン少佐は、狂信的運動の日々の進展を大きな不安をもって見守っていた。誰しも心配性な人物と思われたくはない。とりわけ常に危険と隣り合わせの辺境においてはそうである。しかし結局、彼は不穏な兆候を公式に報告せざるを得なくなった。その後さまざまなポストを担当する将校に警告が発せられ、部隊は警報発令の際に持ち場に就く訓練をした。七月二三日までにすべての人々は事態が脅かされていることを知らされ、あらゆる予防策を遵守するよう命じられた。しかし誰もが最後まで蜂起には懐疑的であり、発生したとしても小競り合い以上のものになるとは想像していなかった。現地人は友好的で丁寧であった。谷は豊作の好況に微笑んでいた。誰にも一週間後に起こる変化を予測することも、数日後に起こる命がけの戦いを推測することもできなかったのは不思議ではなかった。その平和な風景の中に火器と剣を持ち込むことになり／ポロ・グラウンドが騎兵隊の突撃の現場になり／あるいは自分たちと一緒に何ヶ月もの間静かに暮らしていた、陽気な未開人が逆上して獰猛な野蛮人になるなどは。かつてこれほど完全に、これほど早く風景が変化したことはなかった。

そしてその間にも戦争の噂はどんどん高まっていった。一八世紀のロンドンのコーヒールハウスのように、インドのバザールはいつも素敵な物語―つまり想像力に富む頭脳の作り事―で溢れている。一つの取るに足りない事実が見る影もないほど誇張され、歪められる。そこから何千ものついでで非論理的で空想的な結論が導かれる。これもまた事実として流布されていく。そのようにゲームは続く。しかし、これらすべての虚偽と根拠のない噂の中にしばしば重要な情報がひそんでいることがある。バザールの噂は単に現地人の世論の状態を暗示しているだけではなく、真実の萌芽を含んでいることはまれではない。東洋ではニュースは不思議な経路をたどって移動し、その速いことはしばしば不可解なほどである。七月が進むにつれ、マラカンドのバザールはマッド・ファキールの噂でもちきりになった。その奇跡は口から口へと、それ相応に付け足されて伝わった。

全イスラム教徒にとっての偉大な日が近づいている。強力な男が彼らを率いるために立ち上がった。イギリス人は一掃される。新月までには一人もいなくなる。グレート・ファキールは、山中に強力な軍隊を隠している。その時に至ればこれら―騎兵、歩兵、砲兵―は勇み立って出てゆき、そして異教徒を滅ぼすのである。天国の軍勢が時期尚早にあらわ

になることがないよう、ムラーは特定の丘に誰も近づかないように命じた、とさえ明言された。そのように噂は流れた。しかし、これらすべての浅薄な作りごとの中に厳粛な警告があった。

英国の将校および政務担当官は、部族集会について言及した報告の公式通知に注意すること、そして自分の持ち場を安全にするための準備を強いられた。また深刻な出来事が差し迫っているとの見解についてそれぞれ個人的に調査していた。

七月二六日の午後、マラカンド守備隊の下士官と若い将校たちは、ポロをするためにカールに向かった。そこへチャクダラ砦からラトレイ中尉も馬でやって来た。良いゲームになった。隣の村の部族民がいつものように少人数でそれを熱心に見ていた。その態度にはその考えや意図を裏切るものは何もなかった。若い兵士たちは何も見ず、何も知らなかった。知っていればもっと気にしなかったであろう。蜂起はないだろう。あるならなお良い。その準備はできている。ゲームは終了し、将校たちはキャンプや持ち場に戻った。

そのとき奇妙な出来事が起こった―これは辺境部族に特徴的な出来事である。サイス（*インド厩務員）がポロ用ポニーに敷物を載せて衣服を着せ、試合後にグラウンドをぶらぶらしていた。すると見ていた現地人が寄ってきて、戦闘が始まるうとしていたのですぐに自宅を離れることを勧めた。彼ら、このパシヤン人たちは何が起こるかを知っていた。狂信の波が谷を一掃していた。彼らはそれに流されていた。抵抗する力はなかった。まるで痙攣が起こりそうなのを感じているかのように彼らは待っていた。あまり注意深くはなかった。マッド・ファキールが到着したとき、彼らは異教徒たちと戦って殺すのである。それまではポニーを奪う必要はなかった。そして部分的に無神経な、部分的にスポーツマンのような動機で、いくらかのかすかな騎士道精神のようなものもなかったわけではなく、現地人馬丁に警告を与えたのであった。そして謎を悟った彼らはキャンプに無事に帰着した。

この同じ午後遅くに、ディーン少佐がマラカンド守備隊を指揮するメイクレジョン准将に報告した。曰く、問題は非常に重大な局面を迎えていると推測される／大きな武装集団がマッド・ムラーの旗印のもとに集まっており、確実に攻撃があるであろう。旅団を増強するためにガイド隊を呼ぶべきである、と少佐は進言した。遅滞なく進軍するように、という命令の電報がすぐにマルダンに打たれた。八・三〇に当時連隊の上級将校であったP・エリオット・ロックハート中尉が命令を受けた。午前一・三〇に彼らは今や有名になった行軍を始めた。

ガイド隊に電報を打ってから、七時ごろ、准将は他のさまざまな指揮官と面談し、いつ

でも出動できる準備をしておくよう指示した。ディーン少佐はマッド・ムラーの集団が谷を下っていったことを報告し、四マイル離れたアマンダラ峠を保持することを勧告した。それに応じて、メイクレジョン將軍は次のように可動縦隊を編成する命令を出した……

第四五シーク隊

二個中隊 第三一パンジャブ歩兵隊

砲二門 第八山岳砲兵隊

一個戦隊 第一一ベンガル槍騎兵隊

この部隊は第四五シーク隊のマクレー中佐の指揮下に午前〇時に出発することになっており、午前三時に准将指揮下の残りの部隊に支援されることになっていた。

すべての準備は迅速に行われた。ワイヤーが切断される直前の一チャクダラからの電報が九・四五に届き、パシヤン人の大軍勢がキャンプに向かつて急速に移動している、と伝えられた。一五分後、徴税所のジエマダール（*インド下級下士官）がニュースを持って全速力で駆け込んできた。公式ディスプレイを引用するなら「ファキールがカルを通過し、マラカンドへ前進している。徴税所も人々も彼に手向かいはいはしない、そしてキャンプの東側の丘はパシヤン人で覆われている。」

ポロから戻った途端、将校たちをたくさんの仕事待ち構えていた。音楽隊と武器を携行できない少年兵は皆へ急がなければならなかった。輸送、配給、弾薬の注文書を作らなければならなかった。やるべきことはたくさんあったが、やる時間はなかった。やっとすべてが終わわり、部隊は早朝の出発に向けて待機に入った。九・三〇に将校たちはポロ服を着たまま夕食に腰を下ろした。着替える時間がなかったのである。一〇時には、彼らは行進が近づく見通しについて話し合い、小競り合いの可能性を熱心に話し合っていた。より樂觀的な人物は戦いがあると主張した―小さな戦い、それは正しかった―それでも小競り合いだろうと。まだ戦闘を経験したことのない者の多くは予期せぬその機会を喜んだ。より経験のある年配者は、暴動に鑑みて問題を考えた。彼らは部族民に発砲しなければならぬかもしれないが、スワット族は非常に臆病なので決して部隊に手向かうことはできないはずだった。それでもそれはチャンスであった。

突然、その夜の静寂の中で「クレーター」キャンプの練兵場に軍隊ラツパが鳴り響いた。全員が飛び上がった。「集合」の合図であった。将校が剣とベルトを取り、急いで締めていた間、しばらくの沈黙があった。それを単に可動縦隊を整列させようとする警告であると考え、タバコに火をつけるのを待っていた人々がいた。そのとき突然、多方面から小銃のけたたましい爆音が聞こえた、そしてそれは六日間、昼も夜も止むことがなかった。

マラカンドへの攻撃と大辺境戦争が始まった。

発砲音が丘の間にこだました。こだまは今も響いている。広い山岳地帯全体が暴動の混乱に揺さぶられるまで、一つの谷が音の波を受け取っては隣の谷に伝えた。細いワイヤーと長く延びたケーブルが、遠く離れた西の国々に振動を伝えた。遠いヨーロッパ大陸の人々はその中に、鈍く不調和な、衰退と没落の音色を聞いたと思った。英国家庭の人々はその愛する者たち―息子、兄弟、夫―の死の印であるその爆発音を恐れた。外交官たちは賢明に、経済学者たちは心配そうに、愚かな人々はいわくありげで物知りに見えていた。すべてが静まり返った。しかしそれは何千人もの命が犠牲になり、何百万ポンドもの金額が費やされるまでは成し遂げられない課題であった。